

創立70周年を迎え、そして、これから・・・

名誉会員 戸口 豊宏

はじめに、2024年元日に起きました能登半島地震によりお亡くなりになられた方々に対しまして哀悼の意を表しますと共に、被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。

さて、このたび、日本赤十字診療放射線技師会発足70周年を迎えられましたこと、OB会員として誠に感慨深く存じます。

本会は昭和27年、初代会長浅川様が中心となり、「与えられた責任を強く感じ、会の使命達成に努力することこそ会を発展させ、会員の社会的地位の向上と幸を齊すものと信じ、また会員は、心から会を愛することによって、よりよい会として永久に吾々技術者の結びつきの役割を果たす」という信念に基づいて発足されました。(創刊誌より)

その信念に裏打ちされたかのように、各地、各方面で、これまで多くの放射線技師が活躍し、技師一人一人の結びつきが、本会を、日本を代表する放射線技師会にまで発展させるまでに至りました。会員の皆様の日々の努力と実践の積み重ねが、いつの間にか、浅川氏の思い描いた通りの会につながっていたことを、今さらながら実感し、驚いているところでもあります。

そのことを実感させた出来事があります。会員の皆様は診療放射線技師である前に、赤十字社の職員でもあります。災害時には救護で被災地に赴かれることもあるでしょう。現場の技師として、困難に直面することもあるでしょう。その時に思い出していただきたいことがあります。

「あなたには、全国に赤十字の仲間がいます。」と！

私自身、2011年東日本大震災で現地に派遣され、多くの経験を致しました。他赤十字の多くの仲間とも絆を深めてまいりました。その後2016年発生した熊本地震では、神戸赤十字病院の中田氏からポータブル撮影装置や、ポータブル超音波撮影装置設置の要請があり、赤十字技師会が日頃よりお世話になっていました日立製作所、富士フイルム二社からもご支援いただきました。設置に関しましては、唐津赤十字病院の坂井氏に依頼し、無事被災地に設置することができました。

このことは、本社、本会、会員、メーカーの方々が一体となってなされました。誌面をお借りし、皆様に改めて深く感謝申し上げます。

一個人ではなにもできません。すべてはそれまで大切にしてきた全国の仲間という横のつながりから力を貸していただいたからこそできたことだと思っています。赤十字は、全国各地にあり、それぞれが様々な知識や経験を有しており、いつでも共有できます。どうぞ皆様にも、この仲間を、横のつながりを大切にしていきたいと思えます。仲間を大切に、自らの任務を果たすこと。そしてその経験を自身の病院や、本会に還元することは、今後の技師たちにとっても、道しるべとなることなのでしょう。

昨今の診療放射線技師の業務内容は、科学の進歩によって、アナログ時代からデジタル時代に移行し、昔ながらの職人気質や技法は、失われつつあるように思われます。医療機器の発展により、放射線を利用した診断・治療のあり方も大きく変化してきました。AIの発展は目覚ましく、技師の手を煩わせることなく、容易に撮影できる機器が増えてきています。今後はさらに進化し機器が自動撮影し、同時に読影されるという日が来るかもしれません。我々がこのまま日常業務に固執して、流されているままでは、浦島太郎になりかねないという危惧いたしております。しかし、同時に、AIではできない、人と人とのつながりも失ってはいけないとも思うのです。

日本は超高齢化社会を迎えており、著しい出生率の低下から、今後、毎年10万人強の人口が減っていくとされています。人口減少は、働き方、業務内容に大きな影響を与え、病院の再編成も始まることとなるでしょう。既に仙台赤十字病院と、宮城県立がんセンターが統

合されることが報道されています。

今後、時代の波に流されないよう、日々自己研鑽に励み、専門性を高めつつ、人と人とのつながりを大切にして、協調性と職場の和を心掛けて業務に取り組んでいただきたいと思います。

最後に、これからも本会及び会員の皆様のご健康、ご発展を心より祈念し、ご挨拶とさせていただきます。